

# クリエイティブリユース 廃材が喚起するものごと

おおつきひろこ  
(有) IDEA, INC. 大月 ヒロ子

IDEA R LAB の活動を端的に表す業務  
用卵トレーを利用したランプシェード



私はめっぼう物持ちがいい方で、電子オープンレンジはダイアル式の36年前に購入したもの。洗濯機や、炊飯器も30年前のもの。さすがに、ジョイント部分のがたつきやスイッチ部分の接触不良などが多少あるものの、まだまだ役に立っている。

しかし、ふと気が付くと、私たちはものの命が短くなって行く世の中に住んでいるようだ。生活の道具として欠かせない家電にしても、機能の充実は著しいものの、耐久年数は減る一方だ。特にプラスチック部分がいけない。ものの見事に割れてしまって、機能をなさなくなる。修理して使うなら、プラスチックの補修材が必要だろうが入り組んだ形を復元するのは難しい。

そんな生活をしている私たちの身の回りであるから、おのずと廃材があふれてくる。家電関連しかり、その他生産の過程で出てくる端材、生活の様式が変化したために不要になった道具などなど。

それらに着目し、それを新しい解釈で創造的に活用しようというのが、IDEA R LABで取り組んでいるクリエイティブリユースである。IDEA R LABではコミュニティから排出される、あるいは埋もれている廃材を探だし、創造的転用ができそうだと判断したものを収集・

分類・展示・活用している。人々の感性に訴えかける形状を持った魅力的なものを選ぶのはもちろんのこと、活用にあたって、どの程度の加工技術で改変できるものであるかを見極めるのも重要なポイントだ。これまでアートやデザインの普及教育の現場に身を置き、さまざまな年齢の人々とモノづくりやコトづくりを行ってきた経験から、おおよそのデッドラインをひきながら、収集廃材の取捨選択をしている。

IDEA R LABのある岡山県倉敷市玉島には、江戸時代から続く産業がいまも息づいている。足袋づくり、容器づくり、造り酒屋や味噌醤油屋、紙問屋…。そういったところを訪ね歩くと、思いもかけなかった廃材に出会う。うかがった際のおしゃべりの中で、町の産業や歴史、技術を知ることができ、それまで簡単なあいさつ程度だった方々とお付き合いが始まるのもこの活動の大きな魅力である。ラボの附属施設であるマテリアルライブラリー（廃材の図書館）は、仲間とリノベーションしながら整えていっているが、ここの什器類もこういった活動で集まってきた廃材で構成している。廃材を縦横斜めから観察し、新しい解釈でこれまでとは違う用途に活かすことはとても楽しい。さまざまなスキルをもつ仲間と



写真1 マテリアルライブラリーにある廃プラスチックケースを利用したウォールシェルフ

ディスカッションしながら制作すると、その楽しさは倍増する。端材や廃材は不揃いであったり、欠けがあったりするが、それこそが人のクリエイティビティーを刺激するフックとなる。イメージーションがわき出てくると、みんなの顔が輝きだす。それを見るのも、この活動の醍醐味である。

2014年1月にスタートした「クリエイティブリユースでアート！」(写真2)は、東京都調布市で行っているプロジェクトであるが、映画産業の町調布で、廃材探しのワークショップからスタートして、そのドキュメント展示を経て、1年後にはアート展として、招待アーティスト

トであるクワクポリョウタ氏、岩田とも子氏と公募クリエイターの作品を展示した(写真3)。いずれの作品も調布の廃材から生まれたものである。両アーティストは廃材探しから同行し、廃材の向こう側にあるストーリーも掘り上げてくれたように思う。廃棄する側、貰い受ける側、そしてモノそのものにも濃密な物語が存在する。そういったものに思いをはせながら手を動かす時間は特別に豊かだ。創造的であること、それは、人として生きることそのものなのだと思う。そのきっかけを廃材が与えてくれることに深く感謝したい。



写真2 調布市文化会館「クリエイティブリユースでアート！」展 フィilm缶にアート！コーナー



写真3 調布市文化会館「クリエイティブリユースでアート！」展 岩田とも子作品